

参与形態の均衡性から見た日中多人数インタラクションの異なり

楊一林（金沢大学大学院）

1. はじめに

日本人社員が中国人社員と日本語で話しても「盛り上がらない」という感想を漏らすことがある。日本人同士で話すと、笑いや相づちなど情報の共有の際に共感が得られるところでも中国人とは共感が得られないという印象である。このように異なるコミュニケーションスタイルを持つもの同士がインタラクションすることによるずれや違和感の分析が求められている。

これらのインタラクションの分析で最も示唆を与えるのが Goffman の一連の研究である (Goffman, 1963=1980 他)。Goffman (1963=1980) では、相互行為 (インタラクション) を「焦点の定まらないもの」(unfocused) と「焦点の定まったもの」(focused) に分類し、焦点の定まらない場面にかかわりのある活動にたずさわることを「関与」(involvement)、焦点の定まった相互行為に参加することを「参与」(participation) とした。そして「発言が多様に受け取られ、個人が多様な参加状態を持つ循環(circle)」を参与枠組み (Participation framework)¹ と定義した (Goffman, 1981:226)。更に Goffman (1967= 2012) は社会的相互行為における儀礼的要素の修正プロセス (corrective process) の一部として、均衡 (equilibrium) な形態を提示している。インタラクションにおける参与枠組みは、話し手と聞き手のステータスを分析する際の鋳型として様々な分野に応用され、発展してきた (高梨, 2016; 難波, 2017 他)。そのため、本研究でもこれらの「参与」、「関与」、「均衡」の概念を用いて分析を行う。

日中の「盛り上がらない」現象の原因を分析するために有益な研究として難波 (前掲) がある。難波は参与形態の在り方について検討し、会話参与者全員が会話に積極的な関与を示す「均衡」な参与形態と、会話参与の積極性にばらつきがみられる「不均衡」な形態があることを指摘した。そして会話情報の共有状況によって参与形態の均衡性に差がでることを示し、それらの差はフッティングの出現の異なりによって説明されている。日中の「盛り上がらなさ」は会話への参与のあり方、均衡性の異なりに基づくものである可能性があるが、難波は日本語以外の話者における検証がなされていない。また性差についても言及していない。

そこで、本研究は参与枠組みの汎用性の検証並びに枠組みの精緻化を目的とし、インタラクション分析の枠組みに基づいて、日中母語場面での多人数会話インタラクションにおける参与形態のあり方を明らかにする。具体的には ①日中多人数インタラクションには参与形態の均衡性に異なりがあるか、②あるようであれば、その質的な異なりにはどのような特徴があるのか、という二つの問いをたて、日中それぞれ類似したグループの自然会話データを収集し、参与形態の均衡性の異なりについて質的に分析したい。その結果、有用性の高い仮説を提示したい。

2. 調査概要

参与者の詳細情報を表 1 と表 2 に示す。調査時期は 2019 年 5 月から 2019 年 7 月まで、調査地は日本の金沢市と中国の天津市である。調査対象者は日本人グループ (日本語を母語とする日本在住者、以下 JPG) と中国人グループ (中国語を母語とする中国在住者、以下 CNG)、使用言語は母国語である。参与者の年齢、性別、人数及び関係性について、両グループともに 30 年代前後の男女 3 名により構成され、親しい間柄 (仕事外での交流があり) である。また参与者の業種、職種について、両グループともに教育機関に勤務する総務部の職員である。

図 1 にアノテーション画面を示す。データ収集の方法については、楊 (2020) のリサーチデザインを元に実施した。録画に使用された機材は iPhoneX と IC レコーダーである。収録場所は JPG が勤務先の研究室、CNG が職場近くのカフェである。それぞれの会話場面の位置関係を図 2 に示す。ミーティングのテーマは参与者同士で決めてもらい、なるべく普段通りに実施するように依頼した。その結果、JPG は職場の人事と休暇予定について、CNG は職場の人間関係と学生指導について

¹ 原文: participation framework, namely, the circle, ratified and unratiated, in which the utterance is variously received, and in which individuals have various participation. statuses. (Goffman, 1981: 226)

の話題が選ばれた。収録後に、録画データを元に参加者の発話意図や受け手の感想、及び参加者同士の人間関係や職場環境等について、フォローアップインタビューを行った。また、データ分析中に生じた不明点については直接参加者に尋ねることができた。実際に分析に用いたデータは、JPGは5分11秒、CNGは5分17秒となった。録画開始後5分～10分間のデータであるが、一通りの話題が終了までの発話を検討対象とした。データは動画解析ツール ELAN (Sloetjes & Wittenburg, 2008) を用いて発話の文字化とアノテーションを行った。日本語の発話単位は宇佐美(2019)、中国語の発話単位は宇佐美他(2007)に従って分割した。

分析に用いたタグは参加形態の均衡性に関わるフッティングとして、言語情報における①発話 speech, ②相づち・共感 aizusym, ③オーバーラップ overlap, 非言語情報における④頷き unazuki, ⑤笑い warai, ⑥視線 gaze direction の6種類を採用した。測定方法について、楊(前掲)を参照しそれぞれの頻度と時間長を測定した。なお視線について、「特定」(参加者のA・B・Cへ)の方向と「不特定」(その他のXへ)の方向に分けて目視で計測しアノテーションを行なった。

表1 JPG 参加者情報

参加者	A	B	C
年齢	35	29	32
性別	男性	女性	男性
勤務年数	13	8	10
職階	主任	職員	職員
関係	先輩	後輩	後輩

表2 CNG 参加者情報

参加者	A	B	C
年齢	34	33	34
性別	男性	女性	男性
勤務年数	12	11	12
職階	部長	主任	課長
関係	上司	部下	部下

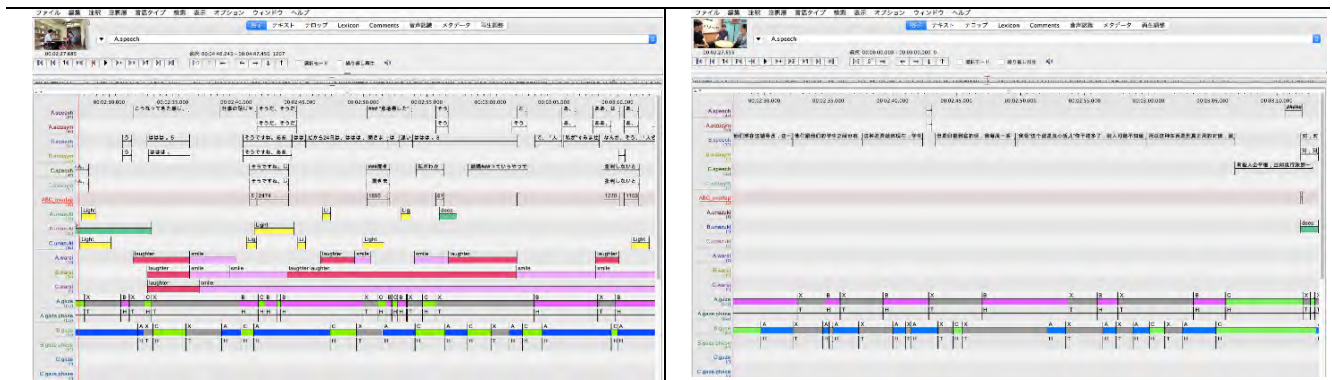


図1 ELAN アノテーション画面 (左JPG・右CNG, 50秒間)

3. 結果・考察

3.1 発話による参加形態

表4にJPGとCNG各話者の発話頻度、時間長合計、一発話あたりの平均発話時間長を示す。まず発話の頻度については、JPGがCNGよりいずれも高かった。カイ二乗検定を行なった結果、参加者A・Bの確率はそれぞれ $p < .005$, $p < .05$ で有意差が認められたが、参加者Cは有意差がなかった。つまり、JPGの参加者A・BはCNGの参加者A・Bよりも高頻度で会話に参加していることがわかった。

表4 JPG・CNG各話者の発話頻度、時間長、一発話あたりの発話時間長の平均

	頻度 (回数)			時間長 (秒)		一発話あたりの発話時間長の平均(秒)		
	JPG	CNG	p 値	JPG	CNG	JPG	CNG	p 値
Aの発話	63	35	***	154.3	109.4	2.4	3.1	n. s.
Bの発話	56	32	*	138.5	143	2.5	4.5	****
Cの発話	47	16	n. s.	120	80.9	2.6	5.1	***

n. s.:非有意, *: $p < .05$, **: $p < .01$, ***: $p < .005$, ****: $p < .001$

次に発話の時間長については、JPG 参加者は大体揃っているが、CNG 参加者はばらつきがみられた。難波（前掲）の指摘通り、発話の長さにおいて、JPG 参加者の均衡性が伺える一方、CNG 参加者による不均衡が捉えられた。また男女でそれぞれ異なる傾向が見られた。男性の場合は JPG が CNG より長い、女性の場合は CNG が JPG より長いことが分かった。そして一発話あたりの発話時間長について、ノンパラメトリック検定で分析したところ、参加者 A の差は非有意なのに対し、参加者 B・C の確率はそれぞれ $p < .001$, $p < .005$ という結果となり、有意差が認められた。つまり CNG より JPG の参加者 B・C は一発話あたりの発話時間長が短いことが明らかになった。

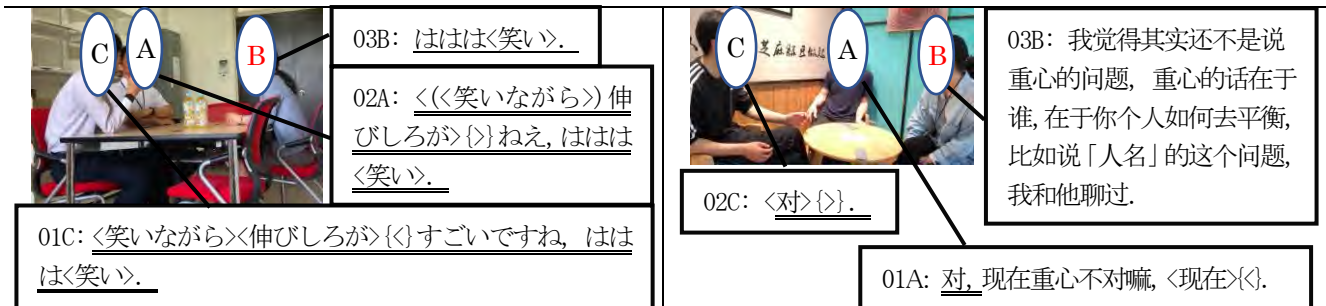


図2 インタクションによる参与形態の一例 (左 JPG, 右 CNG) ²

図2はインタクションによる参与形態の代表的な例を示している。左は日本人グループであり、右は中国人グループである。会話データのトランスクリプトに使用した記号及びその意味について、日本語は宇佐美（2019）に従い、中国語は宇佐美他（2007）に従って行った³。また二重下線部は筆者が追加したもので、相づち・共感を示している。まず JPG の場合は、参加者 C の発言に対して、受け手者 A が<（笑いながら）伸びしろが>を共感的に繰り返す、それから受け手 B が終始に協働的に<ははは（笑い）>をしている。一方 CNG の場合は、参加者 A の質問に対して、C も同一意見<对（そうです）>を述べ、さらに B は問題の所在は<在于你个人（問題は個人にある）>と話題を展開している。図2の例はインタクションの一部ではあるが、参与形態の均衡性について JPG と CNG が質的に異なっている例といえる。

3.2 言語・非言語情報による参与形態の特徴

JPG と CNG 各参加者による「相づち・共感」の頻度と時間長、及び全参加者による発話の「オーバーラップ」の頻度と時間長について分析を行った。その結果、CNG より JPG のほうが高頻度で長時間であった（表5）。表6では JPG と CNG 参加者による非言語情報の特徴を示している。JPG の参加者らは CNG より高頻度且長時間笑ったり頷いたりしていることがわかった。特に JPG の女性は CNG よりスマイルも浅い頷きの頻度も時間も多かった。これらの数値の高さは、JPG が積極的に会話に関わろうと、また共感的・協働的な会話インタクションを創り上げているエヴィデンスといえる。

表5 JPG・CNG 参加者による言語情報の特徴

言語情報の特徴	頻度(回数)		時間長(秒数)	
	JPG	CNG	JPG	CNG
Aの相づち・共感	43	10	89.2	9.2
Bの相づち・共感	28	6	41.7	11.9
Cの相づち・共感	34	3	72.3	3.4
ABCの発話オーバーラップ	38	2	29.2	0.2

表6 JPG・CNG 参加者による非言語情報の特徴

非言語情報の特徴	頻度(回数)		時間長(秒数)	
	JPG	CNG	JPG	CNG
Aの笑い	18	1	73.4	2.6
Aの頷き	21	1	31.7	0.5
Bの笑い	35	0	162.1	0
Bの頷き	28	5	82.2	4.7
Cの笑い	9	0	112.1	0
Cの頷き	32	2	59.6	1.2

² CNG の和訳は次の通りである。01A: はい、今は（業務の）重点が間違っていますよ、<今>は<>。02C: <そうです>。03B: 実は重点の問題ではないと思います、重点とは誰かという個人でしょう、（その人）どのようにバランスをとるとか、例えば「人名」のこと、私は彼と話をしました。（筆者より）

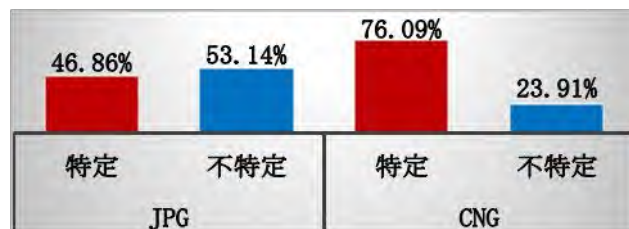
³ トランスクリプト記号の意味は宇佐美（2019）に従い、以下の通りである。

<><>	同時発話されたものは、重なった部分双方を<>で括る。重ねられた発話には<>の後に<>をつけ、
<>><>	重ねた方の発話には<>の後に<>をつける。
「」	プライバシーの保護のために明記できない単語を表すときに用いる。
<>	笑いながら発話した時に<>の中に、笑いが聞こえる場合は、「ははは<笑い>」のように記す。

表7と図3ではJPG・CNGの参与者Aによる視線の方向を示している。全体的な傾向としては、CNGはJPGと異なり、聞き手が発話者を注視し、傾聴する傾向が見られた。更に参与者Aの視線の方向と注視時間について量的な分析を行ったところ、CNGとJPGの傾向に異なりが見られた。つまり、視線の方向については、CNGがJPGより視線の方向が特定されている時間比率が高かった。これより、CNGはJPGと比べ会話参与者への注視時間が長いと言える。

表7 (左) / 図3 (右) JPG・CNGの参与者Aによる視線の方向

参与者A	JPG		CNG	
	特定	不特定	特定	不特定
視線の方向				
時間長(秒数)	145	164.4	239.3	75.2
比率	46.86%	53.14%	76.09%	23.91%



JPGとCNGの参与者同士はそれぞれ会話に参加しており均衡的なインタラクションを構築していた。しかし「相づち・共感」、「オーバーラップ」といった言語情報、また「笑い」、「傾き」といった非言語情報について、JPGはCNGより出現頻度が高く時間長も長い。とりわけJPG女性参与者はCNGの女性参与者より頻度も時間の差も大きかったことがわかった。一方CNGはJPGより他の参与者への注視時間が長く、傾聴的に会話に参加していた。

つまり、日本人グループの場合、話し手と受け手が協力的・動的にインタラクションを構築していく「協働型均衡」の参与形態を選好する傾向がある。その均衡形態では話し手と受け手の発話境界があいまいで、参与者のオーバーラップや短い発話、細切れ発話が多発する。一方、中国人グループでは話し手との発話行為や注視行動を通じて意見を交わし、話し手と受け手が関係性を相互に・対等に深めていく「観賞型均衡」の参与形態を選好する傾向がある。その均衡形態では話し手と受け手の発話が明確に分離され、受け手に立つときは無言で注視行動を行う。

このように、日本人同士の会話インタラクションは「協働型均衡」がベースで、参与者の一人でも無言又は無反応になると、途端に不均衡な参与形態だと認定される恐れがある。そのため日本人社員と中国人社員の交流が盛り上がらないのは、両言語文化に共通する均衡な参与形態空間が形成されにくいことによると思われる。とりわけ短い発話、笑いや傾きの頻度及び時間の長さでJPG女性はCNG女性より高いことから、日本人女性は協働的な均衡性に貢献しているといえよう。

4. まとめ

本研究は日中母語場面での多人数会話インタラクションデータを分析することで均衡・不均衡な参与形態の質的な異なりを明らかにした。しかし一組でのデータであり話題によって偶然導かれた可能性もある。今後更に検証する必要がある。

参考文献

- Goffman, E. (1963). *Behavior in public places: Notes on the social organization of gatherings*. New York: Free Press. (丸木恵祐・本名信行訳 (1980). 集まりの構造—新しい日常行動論を求めて— 誠信書房)
- Goffman, E. (1967). *Interaction ritual: Essays on face-to-face behavior*. New York: Doubleday Anchor. (浅野敏夫訳 (2012). 儀礼としての相互行為 法政大学出版局)
- Goffman, E. (1981). *Forms of talk*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.
- 難波彩子 (2017). 日本語会話における聞き手のフッティングと積極的な関与 竹岡邦好・池田佳子・秦かおり(編) コミュニケーションを枠づける—参与・関与の不均衡と多様性— くらしお出版 pp. 109-126.
- Sloetjes, H., & Wittenburg, P. (2008). Annotation by category—ELAN and ISO DCR—. *Proceedings of the 6th International Conference on Language Resources and Evaluation (PDF)*
- 宇佐美まゆみ (2019). 基本的な文字化の原則 (Basic Transcription System for Japanese: BTSJ) 2019年改訂版 (PDF)
- 宇佐美まゆみ・肖婷婷・戴琦・高娃・李宇霞・仇曉妮 (2007). 基本的文字化の原則の中国語への応用について 談話研究と日本語教育の有機的統合のための基礎的研究とマルチメディア教材の試作, 83-103.
- 楊一林 (2020). マルチモーダルな観点から見た日中ビジネス場面の同調行動の異なり 日本語音声コミュニケーション, 8, 36-55.